オタクのハイスクールD×D

ユウスケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
オタクのハイスクールＤ×Ｄ

【Ｎコード】
Ｎ１７６９Ｕ

【作者名】
ユウスケ

【あらすじ】
ある日神が一人の青年を殺した、しかしそれは神の八つ当たりだった。
冷静になった神は自分の保身のために青年を転生させた。
転生させられた青年の運命は・・・。
※駄文注意

プロローグ

ーイッセーー

俺の名前は兵藤一誠でよく周りから「イッセー」と呼ばれている。
見た目は普通の高校二年生でオタクのどこにでもいる普通の男。
しかし少しだけ秘密がある・・・。
そう、俺は転生者なのだ。
何の能力もチートもないけど・・・。
それにしても俺なんで転生したんだろう？
確か死ぬ前はバイトの帰りで車にひかれたとかそんなことはなかったような気がするんだが・・・。

ーイッセーになる前の話し・・・ー
ー神視点ー

うへへへへ・・・ついに、ついに手に入れたぞ！
人間界に発売されているエロゲ！！
辛かった・・・。
このエロゲを手に入れるまで本当に辛かった・・・。
なぜなら俺は神だ、そう簡単に人間界にはいけないし仕事もなかなかサボる事ができない。
だから色々と手を尽くし人間界に行く事を他の神に認めさせ俺は人間界に行く事が出来た。
しかし代償もでかかった・・・俺の代償・・・それは・・・。
二万冊のエロ本だ！！
そう！俺の大事な大事な『ムチムチ天使ちゃん２００発』や『爆乳天使のもっこり伝説』などなど

を他の神たちにワイロとして送ったのだ。
おかげで俺の心に多大なダメージを与えられたが後悔はない・・・。
何故ならこのエロゲにはその価値がある！！
早速仕事を三日分終わらせて自分の部屋に入る。
パソコンＯＫ・・・ティッシュＯＫ・・・もしものときのためのくそ真面目なホームページを開き準備ＯＫ。
え？何故くそ真面目なホームページを開いたかって？
そんなの決まっている、もし家族が部屋に不法侵入したときゲームを消してそれを画面に表示しとけば
誤魔化せるからだ！！
おっと、そんなことを言っている場合ではないな・・・。
起動♪起動♪
インストールが終了しショートカットをダブルクリックする。
よっしゃー！！キターーーーーーーー！！！
画面が開きＯＰのまえの注意書きが出る。
まったく別にいいだろうこんなもの・・・さっさとＯＰを見せろ。
無駄だと解かりつつクリックを何度か押す、すると・・・
あれ？いつもの成人がどうとかが出てこないぞ？
俺は一度消してからもう一度起動する。
しかしエロゲ特有の注意書きだけが見当たらない。
俺は最悪の想像をしてしまい冷や汗をだらだらと流す。
これは・・・まさか！！
俺は恐る恐るパッケージを手に取る。
な！！こ、これは！！！

「全年齢版じゃねーかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

俺の魂が叫び轟く！！
くそ！なんてこった！！エロシーンがないだとそんな・・・。
俺は絶望し散っていった戦友（エロ本）たちを思い出す。

ちくしょーーーーーー！！
もう全てがどうでもよくなった誰でもいいから八つ当たりがしたかった。
俺は八つ当たりが可能なヤツを頭にリストアップしていく。
そして頭によぎる人物・・・そうゲームショップの店員！！
あいつだあいつにしよう、あいつが親切に教えてくれればこんな事にはならなかった。
ふふふ・・・恨むなら俺に教えなかった自分を恨め！！
俺は雲を操り人間界に雷呼ぶ・・・。
標準ＯＫ、くくくさあ死ぬがいい！！

「天誅ぅぅぅぅぅぅ！！！！」

雷を標的に落としその様子をじっくりと眺める。
店員はこんがり焼け悪は滅びた・・・。
ハハハ・・・アハハハハハハハハハハ！！

ー三時間後ー

やっちまったーーーーー！！
どうしようやべぇよ俺確実に首だよ！！
確実に捕まるよ！
どうすんだよ！とりあえず言い訳を考えてシュミレートしてみよう。
俺は捕まった後のことを考える。

ーシュミレートー

「ねえ、元神様ぁどうして人間を無許可で殺したのかしら？
よかったら教えてくださる？」

尋問の天使が胸元をチラリと俺に見せる

「はい！エロゲの為です！！」

ーシュミレート終了ー

くそ！なんてこった！！言い訳をする前に俺は真実を喋ってしまうじゃないか！！

俺は改めて天界の尋問に恐怖した。

どうすれば・・・どうすればいい・・・。

そしておもむろにパソコンを見る。

パソコンにはエロゲのカモフラージュのためのサイトがあるそしてそのサイトに書いてある

単語・・・『転生』

こ、これだーーーーーー！！

そうだよ魂がハデスのところに行く前に転生させれば、ばれないじゃん！！

ありがとーーー！！サイトを立てた人、あんた最高だ！！！

サイトを立てた人に感謝をしつつ俺は店員の魂を回収してばれないように色々と改造し

転生させた。

ふう、言い汗かいた・・・。

これでみんなハッピーエンド！

そして暇になった俺はエロゲではないギャルゲをプレイすることにした。

「あ、意外と面白い・・・」

1話　中二病

ーイッセー視点ー

私立駒王学園それが俺の通う高校だ、入試は難しいらしいが前世では結構頭のいい大学に通っていた俺には簡単な試験だった。
ズルかもしれないがこればかりは仕方がない。
でも通っていて問題が起きた、そう俺の学園生活を脅かす二人の悪魔だ・・・。

「おう！イッセーおはよう！」

「ああ、おはよう」

教室の自分の席にいると話してきたこいつが悪魔の一人その名も松田。

「イッセー、いいもんが手に入ったぞ！初代ピュティピュアのＡＶだ！！
今日こそ一緒に見ようぜ！！」

こいつはエロい、とんでもなくエロい始めは普通のやつだと思い話しかけたのだが・・・。
とんでもない変態だった・・・でも、こいつを見捨てようとか縁を切ろうとは思ったことはない。
こいつを見ていると前世の自分を少し思い出すからだ。
俺は昔オタク趣味がバレて学校で陰口とか言われていたから松田を見捨てたら陰口を言っていた
奴らの仲間入りするのもいやだったしそれに時間が立てばコイツも

落ち着くだろうと思っているのだが
・・・今とっても縁を切りたいです・・・。

「だから、お前は少し自重しろ！！女子がドン引きじゃねぇか！！」

「おはよう、二人とも。今日も元気だな」

「俺は元気じゃないけど・・・おはよう、元浜」

俺が教室で松田の説教をしているともう一人の悪魔こいつも始めは
松田と同じような
理由で少し時間が経てば落ち着くだろうと思っていたのだが・・・。

「今日は風が強かったな・・・おかげで女子高生のパンチラが見えたぜ」

「朝からそんなことカッコつけて報告するな！！」

もうやだこいつら・・・。
俺がこいつらに声を掛けた自業自得だってことはわかるけどかなり
理不尽だ・・・。

「エロ猿」

「最低」

「変態」

「怖いです・・・」

見てよ、クラスメイトの女子たちの目を・・・まるでゴミを見るかのような目だよ。
そして最後の女の子、怖がらせて本当に申し訳ない。

「おら！女子供は見るな！脳内で犯すぞ！！」

「サイテー・・・」

「しね！エロ猿！」

女子達の態度が気に入らなかった松田は机を蹴って暴れだす。
やめてくれー！！これ以上問題を起こさないでくれーー！！
俺は松田を羽交い絞めにして、抑えるが一人だと限界がある。

「おい、元浜！お前も松田を止めるの手伝ってくれ！！」

暴れる松田を抑えつつ元浜に呼びかけるが・・・。

「すげぇ、本物だ・・・」

「元浜ぁぁぁぁぁ！！」

アイツは松田の持っていたＤＶＤを眺めていた。
・・・誰か・・・助けてください。

ーしばらくしてー

ふう、やっと落ち着いたか・・・。
あれからなんとか騒ぎを収めた俺だがクラスメイト達の目がとてもつらい。

オタク趣味がばれた時の陰口はつらかったがこれはその比ではない・・・。
何故なら廊下を歩けば陰口の嵐・・・何もしていないのに女子にはゴミを見るかのような
冷たい視線を浴びせられ・・・授業の時も・・・だめだもうこれ以上語りたくない。

「きゃー、先輩よ！」

「え、本当？」

突然クラスの女子達が廊下の方に出て行った。
なんだろう？

「おい、イッセー俺達も行こうぜ！」

「ああ」

元浜たちに誘われ廊下に出た。
すると・・・。

「キャー、リアス先輩～！」

外にはこの学校の女子の制服を着た紅い髪の美少女がいた。
なるほど・・・たしかに女子の反応もわかる。
あれほどの美人なら憧れるだろう。
歩いている姿はまるで絵画のよう・・・。

「リアス先輩って本当に美人だよなー・・・」

カシャカシャ・・・

「そうだな・・・うん、ナイスプロポーション」

台無しだ・・・。

ドクン！

「！？」

「どうした、イッセー？」

「ああ・・・なんでもない」

なんだろう、リアス先輩だったけ？

あの人と目が合った瞬間、一瞬鼓動が・・・。

・・・・・・

・・・・・

・・・・

・・・

・

「じゃあ、また明日な」

「ああ、いい夢見ろよ」

学校が終わった後俺達三人はゲーセンに行って暗くなるまで遊び倒した。

そして現在自宅への帰り道に居るのだけど・・・。

最近の俺はおかしい・・・いや頭がじゃなくて体がおかしい。

なんか夜になるとテンションが高くなり朝になるとそのテンションはどこへやら
体は重くなり日傘が欲しくなる。

ザワ・・・！

なんだこの感じ・・・よくわからないけどヤバイって事はわかる。
俺のチキンセンサーが逃げろと、轟き叫ぶ。

「おや？これは数奇なものだ・・・まさか貴様のような存在に出会えるとはな・・・」

何この人？黒い帽子に黒いコートを着た男、雰囲気がヤバイ上に言動もやばいんだけど・・・。
それに存在って、もしかすると俺が転生者だってことがばれた？
もしかして転生の秘密を知りたがっている秘密組織！？

「逃げ腰か、貴様の主は誰だ？」

主って誰？何言ってんだこの人？
はっ！もしかしてこの人は薬物中毒か！？
だったら・・・。
逃げるが勝ち！！！
おれは走った、ものすごい走った。
息を切らし公園の茂みに隠れる。

「はぁ、はぁ・・・逃げ切ったか・・？」

「逃がすと思うか？」

後ろを振り返ると黒い翼を生やしたコートの男が立っていた。
なに！？なんなんだよ！？
もうわけがわからなくなって来た。
この人は薬中じゃなくて中二病患者だったのか？
でも・・・この黒い羽はどこかで・・・。

ーイッセー君、死んでー

くそ！なんか変なビジョンが・・・。
なんか思い出しそうになるけどそれどころじゃねーーー！！

「主の気配がない・・・『はぐれ』か、ならば・・・
殺しても問題はない」

そう言うと、男は手のひらから光の槍のようなものを出現させた。
まさかの光科学兵器！？この中二病どんだけ金持ちなんだ！？
あれ？でもこの展開どこかで・・・。

「死ね！」

ドス！

「がぁぁぁぁぁ！！」

男は俺の腹に槍を投擲し、俺の腹に深々と突き刺さった。
イテェェ！！
俺は倒れ痛みに悶える。

「おやおや、急所をはずしましてしまったようだ・・・
安心しろ、今度は確実に殺してやる」

わずかに聞こえる男の声・・・そうか・・・少しだけ思い出した。
俺これで二度目なんだな・・・。
そして俺は全てを理解した。
俺は前に夕麻とかいう女の子に告白されて断ったら後ろからこの光科学兵器で
刺されたんだ、つまりこの男はあの女の関係者・・・刺したはずの俺が生きていたので
再び殺しに来たんだろう、しかもその殺しに来た奴は変な設定を持ち込んでくる
中二病患者だ・・・くそ！美女に殺されるならまだしもこんな中二病の痛い奴に殺されるのはイヤだ！！

ー・・・想像しろー

はい？

ー最強を・・・ー

ああついに俺も・・・中二病が・・・。
昔中学を卒業とすると同時に完治したつもりだったのに・・・。
ああ、くそ！！やってやるよ！妄想はオタクの得意分野だ、
俺の考える最強を妄想してやるよ！！

2話　中二病・・・怖い（前書き）

テスト勉強の合間に書きました。

2話　中二病・・・怖い

ーイッセー視点ー

突然自分に発病した中二病に戸惑いつつ声に従い妄想を開始し始めた俺

だが・・・。

「！？」

ドン！

「ぐぅ！」

突然男の腕が爆発した事により中断してしまう。

今度は一体何なんだ？それよりも俺・・・意識が・・・。

「この子に触れないでちょうだい」

「・・・その真紅の髪には見覚えがあるな、グレモリー家の者か」

ぼんやり見えるのは松田たちと見た紅い髪の美少女、リアス先輩だった。

どうして・・・？

「リアス・グレモリーよ堕ちた天使さん・・・この子にちょっかいを出すなら容赦しないわ」

「これは、これは・・・その者はそちらの眷属か・・・ならば下僕は放し飼いにはしない事だ
私のようなものが散歩ついでに殺してしまうからな」

なにそれ・・・？俺が先輩の眷属・・・？

「ご忠言痛み入るわ。この町は私の管轄なの、私の邪魔をしたらその時は容赦なくやらせてもらうわ」

「そのセリフそっくり返そう、グレモリー家の次期当主よ。わが名はドーナシーク、
再びまみえないことを願う」

話の内容はよく理解できなかったが、奴は黒い翼を使い飛んで行った事は理解できた。
おいおい、どこの最先端技術だよ・・・翼はコスプレ用じゃないのか？
ってそんなこと考えてる場合じゃないな・・・。
槍は電池切れを起こしたのか消えたけど、俺の腹は穴が開きっ放しで血がどんどん流れる。
ああ、俺また死ぬのかな・・・？
そういえば夕麻とかいう女に刺されたときどうやって助かったんだろ・・・・？
だめだもう・・・なにも・・・考え・・・ら・・れな・・・い。

ーリアス視点ー

私が堕天使の気配を察知して向かったときには、私の新しい下僕は

光の槍に刺され
もう死に掛けの状態だった。
それなのに一瞬だけとんでもないプレッシャーを放ちどどめをさそうとしていた堕天使
の動きを止めた。
正直私も驚いてしまったが、私はすぐに堕天使に魔力の塊を撃ち出した。
そしてあの子から放たれていたプレッシャーが消えた。
もしかして死んでしまったのかと思い堕天使とあの子の間に割ってはいるとわずかな呼吸音が聞こえる。
私は安堵の息を漏らし、堕天使を撃退した。
その後あの子に近くに行き怪我の具合を見る。
・・・これぐらいならなんとかなるわね。
ふふふ、それにしても神器といいさっきのといい本当に面白い子ね。

3話　先輩も中二病

ーイッセー視点ー

ピピピ！ピピ・・・。

「う～ん・・・」

いつもの時間に目覚ましが鳴り響き、起きる俺。
さて、学校に行く準備でも・・・・。

ムニュ

ん？
起き上がろうとした時に、何か柔らかいものが肘に当たる。
あれ？俺のベットに、こんなに柔らかい物あったっけ？
俺の持っている寝具でここまでやわらかい物はなかったはず。
親が買ってきてくれたのかな？
俺はその柔らかい物の見るため、肘の方を見る。
すると俺の肘に当たっているのは・・・。

「ん・・・」

女性の胸部にある二つの膨らみだった。
おおおおおお、落ち着け俺！まだ寝ぼけているんだ！！
現実に戻って来い！！
俺は頬をつねり、深呼吸した後もう一度見て検証する。
何故か、裸の俺。
隣には紅い髪を持ち、素敵な寝顔をした裸の美少女。

そして、俺の肘に当たる普通の女性よりも発達した二つの膨らみ。
検証の結果・・・。
やっちまったーーーーーーー！！！
確定だよ！疑う余地がないよ！！
昨日、俺に何があったーーーーー！！！
今までに経験した事がない朝を迎えた俺。
しばらくは混乱したが、時間が経つにつれて落ち着きを取り戻した。
よし、とりあえず冷静に考えよう。
現在、シーツ一枚で俺のベットを占拠しているのは紅い髪が目立つ三年のリアス先輩。
昨日は確か・・・、松田たちとゲームセンターに行って暗くなるまで遊んだ。
そして、その後は・・・。黒い服を着て。光学兵器を振り回す、危ない中二病に襲われて。
最後はリアス先輩に助けてもらったんだっけ。
たしか俺がリアス先輩の眷属とか言われていたような・・・。

「イッセーいるの！？アンタ何時、帰ってきたの！
ちょっと詳しく聞かせてもらいましょうか！！」

どたどたと階段を上ってくる。マイマザー。
おそらくあの様子だと俺の部屋に侵入してくるだろう。
そして現在の状況を見る。
ベットに裸の美少女。
裸の俺。
やばい！

「ちょっと待って！今そっちに行くから！！」

「今度という今度は許さないわよ！！」

俺の言葉を無視して、階段を上るマイマザー。
くそ！俺の脳よ、この状況をごまかす必殺の言い訳を思いつけ！！
俺は脳をフル回転させる。

「うーん・・・朝・・・・？」

後ろから聞こえる先輩の声。

「先輩！とりあえずこの毛布を！！」

俺は近くに畳まれていた毛布を取り出し、
リアス先輩に渡そうと近づくのだが・・・。

パフ

焦りすぎていたせいだろうか？俺は足元に合った何かに足を滑らせたうえ、
最悪な事にリアス先輩の胸に顔面ダイブしてしまった。
すぐに離れようとしたのだが・・・。

ガチャ！

「イッセー・・・？」

「あ、おはようございます」

勢いよく部屋に入る母さん。そしてこの状況を見て固まる母さんに
挨拶をする先輩。
・・・終わった。

「・・・ハヤクシタク・・・シナサイネ・・・」

パタン

「お、お父さん！イッセーが！」

「なんだ母さん。もしかしてアイツの一人エッ「セッセッセッセ・・・！」

「どうした母さん！？落ち着くんだ！！」

「国際的ィ！イッセーがぁぁぁぁ！！」

大惨事です。

「朝から元気な家ね」

俺が先輩から離れると、微笑みながら言う。

貴女が元気の原因です。

「先輩、早く服を着てください」

精神的に大ダメージを受けた俺は、先輩を背に服を着始める。

はあ・・・。

「そういえば、お腹は大丈夫？」

「あ、そういえば・・・」

先輩に言われ、自分の腹に視線を落とす。
昨日、中二病の男に刺されて開いた穴が、後を残さずふさがっている。
もしかして俺の夢だった？

「ちなみに、傷は私の魔力を分け与えて治したわ。
裸で抱き合ってね」

先輩の口ぶりから夢じゃない事は想像がつくけど・・・、
魔力ってなんですか？先輩も中二病だったんですか？

「私は、リアス・グレモリー。悪魔よ」

この一言で俺は理解した。
先輩も、あの男と同じ中二病だ

4話　恥ずかしい公開処刑　By イッセー

ーイッセー視点ー

あの後、先輩が両親を催眠術で今朝の事を誤魔化し、
何事も無かったかのように学校に向かった。
すごいね、催眠術ってやらせだと思っていたのに・・・。
そして現在俺は、木場（きば）　悠斗（ゆうと）
につれられて、オカルト研究部の扉の前に来ている。
それにしても、なんで旧校舎なんかにあるんだ？

「部長、連れてきました」

「入って頂戴」

木場が扉を開けて中に入ると、俺はドン引きした。
何故なら、床には魔法陣のような物が書かれていたり。
黒板を見れば、見たことのない、言語で何かが書かれている。
ヤバイ、これはヤバすぎる。
俺の頭では逃げろ！退避！退避ーー！とサイレンのように鳴っている。
ここで逃げていても、いつかはつかまってしまう。
だったら、さっさと用件を終わらせて、もう関わらないようにするだけだ。
俺は逃げたい気持ちを押さえ、歩き出す木場についていく。
？あれは、たしか・・・。
魔法陣を見て、パニくっていたせいか、ソファーに居る人物に今気づいた。
たしか、塔城（とうじょう）　子猫（こねこ）。

一年生で、なんでも彼女のロリボディでかわいらしい姿から
男子、女子に問わず人気があるんだとか。（元浜・松田の情報）
はじめて聞いたときは、あの二人の妄想かと思ったのだが、どうやら本当だったようだ。
だって、子猫って名前の人が本当に居るとは、思えなかったんだ。
一体、両親は何を考えて、あの名前にしたんだろうか？
まあ、たしかにかわいらしいが、この子も中二病なのか・・・。
でも、高一だし容姿的にもまだ、中二病で大丈夫なのか？
それにしても、無表情だな・・・キャラ作り？

「こちら、兵藤君」

木場が塔城さんに俺を紹介する。
それに反応して俺を見る塔城さん。
一応、挨拶をしておこう。

「どうも、初めまして」

「・・・どうも」

挨拶をしたが、軽く返すとお菓子を取り出し
食べ始めた。
俺　＞　お菓子
なんか、悲しくなってきた。
少し、落ち込んでいると近くからシャワーの音が聞こえてきた。
音の方に顔を向けると・・・バスタブがあった。
ここって、運動部じゃないよね？ただのオカルト研究部だよね？
いや、ここでは常識は通用しない空間なんだ。割り切るんだ、俺！
自分に言い聞かせてしばらくすると、制服を着たリアス先輩と、
もう一人知らない女性が出てきた。

かなり綺麗な人だが、おそらくこの部活の部員なんだろう。
きっと、何かあるに違いない。

「あなたが、兵藤　一誠君ね？
初めまして、三年の姫島（ひめじま）　朱乃（あけの）と申します」

「はい、よろしくお願いします」

あれ？意外と普通だ。
もしかして、全員が全員。中二病じゃないのか？
そんな疑問を思いつつ、挨拶を返す。
たぶん、姫島先輩はリアス先輩の友達で部員が少ない事から入ってくれと、頼まれたんだろう。

「さて、全員そろったわね」

リアス先輩がそういって全員ソファーに座り。
姫島先輩がお茶を出しに来てくれた。
本当にいい人だ。
将来はきっと良い、お嫁さんになるに違いない。

「オカルト研究部はイッセーを歓迎するわ。
手短に言うと私達は悪魔よ」

あー、またですか・・・。
正直、勘弁して欲しい。昔の自分を思い出しそうになってしまう。
具体的には、転生して十歳になった時、ドラグ・スレイブやアニメ魔法を一人、部屋で唱えていた事を。
ああ、恥ずかしい。

「信じられないって、顔ね」

「まあ、そうですね」

当然である。
現代で魔法や、ファンタジーが本当にあるなんて子供ですら信じないぞ。

「昨夜の黒い翼の男を見たでしょう？
アレは堕天使。
堕天使とは、元々神に使えていた天使が邪な感情を持ったが為に地獄に落ちた存在。
私達、悪魔は地獄の覇権を古より争っているの。
悪魔は人間と契約して対価を貰い力を得る。
一方、堕天使は人間を操り、悪魔を排除しようとしてくる。
天使は神に悪魔と堕天使を滅するように命令をうけて三すくみの状態が続いているの」

なるほど、簡単な中二設定を言ってくるのかと思っていたけど、意外とこっているようだ。
小説にしたら面白いと思う。
もしくは、オカルト研究部の講義？
まあ、とりあえず信じたフリをしておこう。
信じてない素振りを見せたら、長い講義になるかもしれない。
ばれないように真剣な顔をして・・・。

「そうですか・・・」

「あら？意外と物分りがいいのね？」

「そうですね？私も意外でした」

俺が返事をするとリアス先輩と姫島先輩が意外そうに喋る。
リアス先輩はおそらく今まで聞いた生徒が中々肯定しなかった、ゆえの意外なのだろう。
姫島先輩は常識的に考えて、意外と思ったのだろう。
リアス先輩。もう少し自重しましょうよ・・・。
そんな事を思いつつ、今度は神器について説明された。
なんでも、俺の中に宿っているという設定らしい。
なるほど、それで俺を呼んだのか。

「目を閉じて、一番強い力を出せるポーズをとりなさい」

「・・・はい」

恥ずかしいが、これで出なければ俺は自由だと思い、言われた通りポーズをとる。
めっちゃ恥ずかしい！！
ちなみにポーズは赤い弓兵の投影感じ。

「そのまま、思いっきり力を解放する感じでやりなさい」

え？このまま、無限の剣製をしろと？
まあ、オタクの彼女の事だ、なんだ赤い弓兵かと、思うに違いない。
しょうがない、やるか・・・。
確か目を瞑って・・・想像しながらやる。

Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ.
（体は剣で出来ている）

Steel is my body, and fire is my blood.
（血潮は鉄で、心は硝子）

I have created over a thousand blades.
（幾たびの戦場を越えて不敗）

Unknown to Death.
（ただの一度も敗走はなく）

Nor known to Life.
（ただの一度も理解されない）

Have withstood pain to create many weapons.
（彼の者は常に独り剣の丘で勝利に酔う）

Yet, those hands will never hold anything.
（故に、その生涯に意味はなく）

So as ・・・！？

最後まで言い切ろうとした時に左腕に違和感を感じた。
目を開けて、左腕を見てみるとビックリ。
何時の間にやら、腕に赤い宝玉の付いた赤い籠手のようなものがあった。
何？この高そうなおもちゃ？もしかして、先輩達に目を瞑っている間に取り付けられた？

取り外しかたを聞こう、先輩達を見るが皆の様子がおかしい。
なぜ？

「イッセー。今のは何？」

あれ？以外だ。先輩は知らないようだ。
しかたがない、簡単に教えてあげよう。
はあ、俺はいつになったら帰れるのだろうか？
そうして、俺は適当に説明して帰った。

ーリアス視点ー

イッセーを家に帰した後、思い出す。
彼のやったイメージはなんでも固有結界というものらしい。
術者の心象風景によって世界そのものを塗り潰す大魔術、「固有結界」。
聞いた事はないが、何かの小説か、アニメかはたまたゲームかは分からないが
もしかしたら彼の創作なのかもしれない。
もし、彼の想像の産物だったら、これは凄い事ね。
魔力はイメージで具現化する。
たとえば、炎、雷、水などといった物やただの魔力の塊なんかもイメージで出来る。
これは、おもしろいことになりそうね。
ますます、彼に興味が出たわ。
その後、木場達に契約の仕事を任せて固有結界についてネットで調べてみた。

結果はゼロ。
一件もヒットはしなかった。

4話　恥ずかしい公開処刑　Ｂｙイッセー（後書き）

なんか、グダグダになってしまいました。

5話　拉致？

ーイッセー視点ー

昨日、先輩達呼び出されて、もう用は済んだと思っていた俺なのだが・・・。

「じゃあ、このチラシを配ってきて」

本日も呼び出された挙句、俺はオカルト研究部に入部させられていたのを知った
なんてこった。
おそらく昨日の固有結界が、お気に召したのだろう。
反論しても無駄と判断した俺は、また爵位がどうだの説明されて、
テキトーに流し。
そして、現在はリアス先輩改め部長にチラシ配りを頼まれた。
今までは、使い魔というバイトさん達を雇っていたのだが、部活の
新人が来た場合、
その新人にやらせるのが、しきたりらしい。
さっさと終わらせて退部届けを出そうと思ったのだが・・・。
量がハンパないです・・・（泣）
そう、塔城さんが何所からともなく大量のダンボールを運んできた
のだ。
あの小さな体で、どこにあのような力が、と驚きたかったが
大量に積まれたダンボールのせいで余裕がない。

「頑張ってきてくださいね」

「・・・はい」

この中で、一番の常識人だと思われる、姫島先輩に応援され。
俺は町でチラシを配り続けた。
しかし、配るたびに思う。
オカルト研究に関係ないだろうと。
始めは、不思議を募集とか、オカルト現象を探しています、などの情報を集めるためのもの
だと思っていたのだが・・・。
配っているチラシに視線を落とす。

ー願い叶えますー

と一文が書いてあり、その上に魔法陣のようなものが書かれている。
おいおい、新手の詐欺ですか？
とても胡散臭くて、捨てたい気持ちでいっぱいだがこれも退部届けを出すためだ。
しかたがない。
そして俺は無事に訴えられる事も無く、部長に言われた範囲で、チラシを数日で配り終えた。

ー配り終えた次の日ー

学校が終わり、部活の時間になった。
俺は朝、手に入れた退部届けをポケットに入れて、旧校舎にある部室に向かった。
部室からは、先輩達の話し声が聞こえる。
もう来ているようだ。
姫島先輩のお茶が飲めなくなるのは、残念だが。
俺は今日でオカルト研究部を退部する！
まあ、入部した記憶もないんだけどね。

がら

「あら、イッセー。朱乃から聞いたわ、チラシを配り終えたそうね」

「あ・・・はい」

扉を開けて部室に入ると、部長にチラシの事を言われた。
どうやら俺は報告をしなくていいようだ。
よし、このまま退部届けを・・・。

「じゃあ、イッセー。手を出して」

「はい」

届けを出そうと手をポケットに入れようとしたのだが、手を出して欲しいと言われた為、
素直に手を出す。
もしかして、褒美かな？
そんな事を思いながら待っていると、部長が俺の手を握ってきた。
え！？
部長に手を握られて驚いたが、それ以上に自分の手のひらを見て驚いた。
なんと、俺の掌に見慣れないマークが出てきたのだ。
何これ！！？

「じゃあ、朱乃。転移魔法をお願い。」

「はい、分かりました」

あ、なるほど。
ご褒美は魔法の実験体ってやつですか。
期待して損した。
そしてやっぱり、あっち側だったんですね、姫島先輩。
部長が何か言っているが、姫島先輩のイメージが崩壊したショックで聞こえない。
まあ、さすがに無視は出来なかったので適当に返事をする。

「それじゃあ、イッセー。魔法陣に入りなさい」

「はい」

ショックから復帰した、俺は部長に言われた通りに魔法陣の上に立つ。
なんだろうこれ、なんか力を感じる・・・。
って、いかんいかん！
落ち着け俺。
早く退部届けを・・・。

「到着後のマニュアルを覚えている？」

「はい。たしか契約を交わして、代価をもらうんですよね？」

確か昨日、部長に渡されて一通り読んだのだけど・・・。
って、違うぞ俺！早く退部届けを渡すんだ！！

「行ってらっしゃい、イッセー！」

「部長！実は・・・！？」

俺は部長に退部届けを出そうとポケットから退部届けを出したのだが・・・。
あれ？ここどこ？
今、俺が居るのは小奇麗でこざっぱりしている部屋に居る。
さっきまで、俺は部室に居たのに何故？

「あれ？子猫ちゃんじゃないのかい？」

突然横から、声が聞こえてきたのでふと、横を見ると。
痩せ型の男性が居た。

6話　俺・・・、改造人間なんだ。（前書き）

アンケートの結果、改造人間になりました。
アンケートに答えていただいた皆さん、ありがとうございました。

6話　俺・・・、改造人間なんだ。

ーイッセー視点ー

何これ？どういうこと？
もしかして本当に移動したの？
魔法で？いやいや！さすがにないだろう。
たぶんアレだ。ドラえもんの道具みたいなもので飛ばされたんだろう。
光化学兵器を作る事のできる時代だし、これくらいできると思う。
凄い科学力だ。

「ねえ、君。聞いているのかい？」

「あ、はい」

とりあえず、この男性と話をすることになった。

「つまり、子猫ちゃんがいなかったから君が来たと言うわけだね？」

「はい」

この男性は森沢さんといって、昼間は公務員として働いているらしいのだが、
たまたま、手に入れたチラシを見て試したんだそうだ。
そして出てきたのが東条さんだったらしく、一目惚れしてしまって。
よく塔城さんを召喚するんだとか。
話を聞いて、部室に塔城さんが居なかった事から、俺は代わりに飛ばされたのだと判断した。

なるほど、つまりこれはあれだな。
この人はロリコンだ。
話し方は紳士だが、性癖は残念すぎる。

「それで、塔城さんに何を願うつもりだったんですか？」

まあ、この仕事を終えてから退部と解けを出せばいいし。
一つぐらいやってもいいだろう。
どうせ、誰にでも出来る願いだろう。
掃除か？洗濯？それとも雑用？
そんな軽い気持ちから、願いを聞いてみたのだが・・・。

「これを、着せようと思って・・・。」

まさかの、女子高生の制服が登場。
変態だ。変態がいる。
神様、俺が何かしましたか？

「まあ、いいや。君は特技はないの？悪魔ならあるよね？
こう、不思議な力的なものが。ちなみに子猫ちゃんは怪力だったよ」

あるわけないだろ、変態野郎。
そう、罵倒してやりたかったが我慢した。
それに、怪力って・・・。
たしかに塔城さんはダンボール５箱を一気に運んではいたけど何か
習っているんだろう。
あいにく俺は、習い事なんてしていないからそんな物はないし。
そんなのがあるなら、俺を刺した翼の生えた、改造人間みたいに改
造されていないと無理だ。
そういえば、改造人間で思い出したけど、俺ってどうして助かった

んだろう？
穴の開いていたお腹をさする。
もしかして俺って改造された？
数日前のあの赤い籠手も先輩達が取り付けたんじゃなくて、俺が改造されたから？
いやいや、落ち着くんだ俺。
とりあえず試してみよう。

「じゃあ、ちょっとやってみますね」

「うん」

えーと。たしか一番強い存在を想像して・・・。
次に、その存在が一番力を発揮する姿を真似ればいいんだっけ。
目を瞑って、前にやったようにすると・・・。

「へ～、凄いね。武装ができるのかい？」

出来てしまった。
つまり俺は・・・。
改造人間にされてしまったようだ。

7話　契約の果てに・・・。

ーイッセ視点ー

正直、改造人間にされていたのは驚いたが、すぐに落ち着くことが出来た。
まあ、こうして生きているのは改造されたおかげだし別にいいだろう。
それに俺は転生なんていう、摩訶不思議を体験しているんだ、これくらい
平気さ！
虚勢を心の中で張りつつ涙眼になる。
俺、人間やめて改造人間ＡＫＵＭＡになったんだな・・・。
もしくは改造人間タイプＡＫＵＭＡ？ほかにもＤＡＴＥＮＮＳＩとかＴＥＮＮＳＩもいるみたいだし・・・。

「いいもの、見せてもらったし君と契約しようかな」

「はい、ありがとうございます」

森沢さんが、契約してくれると聞いて、先輩に渡された携帯電話をとりだす。
対応も仕事中なのでちゃんとやる。
ゲームショップで培った営業スマイルを見せてやる。

「定番だけどお金持ちはどうかな？」

おいおい、いきなり無理難題を言ってくれますね。
いや、俺にはこの部長にマニュアルと一緒にもらった携帯電話があ

る。
おそらく、これはドラえもんよろしく、願いをかなえる機械なのだろう。
マニュアルに書いてあった操作方法を思い出しつつ操作していく。
おお！すごい！！部長の正体はドラえもんか！？
しかし、この願いはかなえる事は出来るらしいが代価が酷すぎる。

「えっと、森沢さんの場合、それを願いにされると代価は命ですね、簡単に言ってしまうと
死んでしまいます」

「死ぬの！？」

「はい、なんでも代価は人の価値によって決まるようなので・・・。申し訳ないんですけど、森沢さんの場合はお金持ちの願いで死んでしまいます」

「そ、そうか・・・。ちなみに叶えたら、どれぐらいで死ぬの？」

「えーっと、天からお金が降ってきた所で死んでしまうようです。」

「そんな！札束で君すら殴れないのか！」

「そんなこと、言われましても」

代価なのだからしょうがないとしか言えない。
それよりもあんた、よく初対面の人間を殴ろう思えましたね。

「じゃ、じゃあ、ハーレムは？女の子いっぱいの酒池肉林が願いならどうなの！」

ハーレムか・・・。
男が一度は思うであろう幻想。
まあ、お金持ちで命なんだから、たぶん無理だろう。
そう、思いつつ操作する。
あらら・・・、やっぱり。

「森沢さんがその願いを叶えると、美女、もしくは美少女が視界に映った瞬間に死にます」

「見ただけで死ぬの！？」

「・・・はい」

「う、うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁっぁぁぁぁぁん！！！！」

俺が代価の説明をして、肯定すると、森沢さんが子供のように大泣きしてしまった。
さすがにここまで来ると、かわいそうを通り越して哀れに思えてくる。
その後の俺は森沢さんの心をケアするのに、時間を費やす事になった。
ガンバレ森沢さん！！きっといいことあるさ！！

ー次の日の放課後ー

現在、不機嫌な部長の前に居る。
眉は吊り上り、無言である。
超怖いです！

「イッセー」

「はい」

「依頼者を慰めて、その後はどうしたのかしら？契約は？」

「すみません、破談になりました」

部長の質問に、申し訳なく思いつつ、正直に答える。

「・・・契約後、例のチラシにアンケートを書いてもらうことになっているの。

依頼者の方に『悪魔との契約はどうでしたか？』って。

チラシに書かれたアンケートはこの紙に表示されるんだけど」

部長はアンケートの文面を俺に見せてきた。

おお、さすが超科学！とても便利だね！？

「・・・『うれしかった、あんなふうに慰められたのは両親以来です。

またイッセーくんにお会いして、今度はいい契約をしたいと思います』・・・。

これが、依頼者さんのアンケートよ」

おお！森沢さん。

俺、何にも出来なかったのに・・・。

「こんなアンケートは、初めてだわ。ちょっと、私もどうしていいのか分からなかったのよ。

だから、少し困ってしかめっ面になってしまっていたんでしょうね」
なるほど、どうやら怒ってはいないようだ。
よかったよかった。
俺は心から安堵して、胸を撫で下ろす。

「まあ、悪魔としては失格なんでしょうけど、面白いわ。
それだけは確実ね。イッセー、あなたは前代未聞尽くめだけど、とても面白い子ね。
意外性ナンバーワンの悪魔かもしれないわ。でも、基本は守ってね、
依頼者と契約を
結び、代価をもらう。いいわね？」

「はい」

よし！次こそは契約を結ぶぞ！！
あれ？何か忘れているような気が・・・。
まあ、そのうち思い出すだろう。

7話　契約の果てに・・・。（後書き）

応援・感想などをお待ちしております。

8話　はぐれＡＫＵＭＡ

ーイッセー視点ー

改造人間ＡＫＵＭＡになった、俺。
今日も、神話や御伽噺に出てくる悪魔のような仕事をしている。
しているのだが・・・。

「待ってたにょ」

部室からテレポートをした俺は、今、不気味な生物の前にいる。
筋骨隆々の男が頭部に猫耳をつけ、ゴスロリ衣装を着込んでいる。
しかも、男の筋肉で今にもボタンがはちきれそうで、服が悲鳴をあげている。

「あの・・・ご用件は・・・」

逃げたい衝動を必死で押さえ用件を聞く。
すると、男・・・いや漢は待ってましたと言わんばかりに
目をカッっと効果音がするくらいに広げ・・・。

「ミルたんを魔法少女にしてほしいにょ」

魔法少女！？
予想を斜めに行く願い事に、かなり驚く俺だが何とか自分を保ち
返答する。

「異世界に行って下さい」

全然、保てませんでした。

「異世界には行ったにょ」

いったの！？

「でも誰もミルたんに魔法の力を与えてくれなかったにょ」

この人、まさか麻薬所持してるんじゃ・・・。
話を聞けば聞くほどこの人の異常さが伝わってくる。
さっきまで、この人のインパクトが凄すぎて気が付かなかったが、この人の部屋もかなり凄い。
棚には魔法少女のフィギアが飾られ、テーブルには同じ魔法少女のカップに
壁にはポスター・・・。
おそらく、魔法少女が好きすぎてこのような状態になってしまったのだろう。

「だから、宿敵の悪魔さんにお願いするしかないにょ！」

宿敵！？
おそらく、魔法少女の宿敵を自分の宿敵と思っているようだ。

「ミルたんに・・・。
ミルたんにファンタジーなパワーをくださいにょおおおおおおおおお！！」

「あぁぁぁぁぁぁあああああああぁぁぁぁああああああ！！！！！！！」

この日、一生、忘れる事が出来ない思い出が出来ました・・・・。

あれから夜が明けて、朝になった。
結局、俺は願いを叶える事ができず、ミルたんにしかたがないから
魔法少女マジカル
なんとかを鑑賞するにょとか言われ、ずっと見ていた。
自宅に無事、帰還した俺は、学校の支度をして登校する。
授業が終わり、いつものように部活に行くと部長にまた、困惑された。
そりゃあそうだ。
二度も契約に失敗したくせに、感想には賛辞が書いてあるのだ。
この日は俺の仕事は無く、家に帰る事に。
そういえば、何か大事な事を忘れているような気がするだけど思い出せない。
なんだったかな・・・（※退部届です）

「ひゃあ！」

声がした方を見ると、公園でシスターが転んでいた。
大丈夫だろうか？
気になったのでとりあえず、近くまで歩いていき、手を差し伸べる。

「大丈夫ですか？」

「どうも、ありがとうございます・・・」

そういうとシスターは俺の手を掴み立ち上がった。
それにしてもこの子かわいいな・・・。
金髪のブロンドに見たことがない、緑色の瞳、

年齢は俺よりも下だろう。
でも、この子は外国人の人だよね？
なんで言葉が分かるんだろう？
ふと、考えると・・・。
思い出した！そういえば部長に聞かされた、改造人間の力の一つ、
言語があったんだった。
俺の想像だが、おそらく俺の耳に入った外国語が日本語に変換され、
脳に伝わるのだろう。
なんと便利な事だ。

「旅行？」

「いえ、今日からこの町の教会に赴任する事になったのですが・・・
道がわからず迷ってしまったんです。
道を聞こうにも日本語がわかりませんし・・・」

ふむ、教会なら分かるし、俺が案内しようかな。
ミルたんのダメージがこの子のおかげで軽減されたし。

「教会なら、俺が案内しようか？」

「ありがとうございます！これも主のお導きですね！！」

そういって、十字架を手に持って見せた。
はぅ！
とつぜんの悪寒。
おそらく、悪魔をモデルにした改造人間だから十字架は拒絶反応を
起こしてしまうのだろう。
出来るだけ、十字架を見ないように、彼女を教会の近くまで送り届
けた。

だって、離れているのにこんなに悪寒がするんだぜ、これ以上近くに行ったら発狂するかもしれないし。
改造人間ＴＥＮＮＳＩがいるかもしれない。
また、刺されたらやだしね。

「じゃあ、俺は用事があるからここで帰るよ」

「そうですか・・・残念です」

「あ、俺の名前は兵藤一誠。
イッセーと呼んでくれ」

「私は、アーシア・アルジェントです！
アーシアと呼んでください！」

とりあえず名前を名乗っていなかったのを思い出して、名乗っておいた。
しかし、アーシアちゃん、凄いテンション高いね。
おそらくかなり純粋な子なんだろう。
まあ、ウチの部員達もある意味では純粋だけど・・・。
中二病じゃなかったら、おそらく部長や姫島先輩をかなり意識していたであろうが・・・。
って、今そんなことを考えていてもしょうがないな。
さっさと帰ろう。

「じゃあ、またねアーシアちゃん」

「はい！イッセーさん！必ず会いましょう！」

その後・・・

「・・・・悪魔祓いを受けた悪魔は完全に無に還るのよ。
それがどれほどの事か・・・貴方にわかる？」

えー、現在俺は部室で部長にお説教を受けている。
不思議な事に、俺が教会の近くに行ったことやシスターであるアーシアちゃんと接触したのが
ばれたらしい。
まったく誰が密告したのやら・・・。

「ともかく、今後は気をつけてちょうだい」

ようやく、お説教が終わりほっと一息ついたところで姫島先輩が現れた。
しかし、その顔はいつものニコニコ顔ではなくかなり真剣なものだ。
なにかあったのだろうか？

「討伐の依頼が来ました」

討伐？
狐狩りか何か？
その後、部員全員である建物に行く事になった。
なんでも、はぐれＡＫＵＭＡと呼ばれる。
存在が建物の中で人を食べているらしい。
はぐれＡＫＵＭＡとは、主の下から離れ、
単独で行動する、いわゆる野良犬のようなものらしい。
はぐれＡＫＵＭＡは見つけ次第に消滅させるのがＡＫＵＭＡのルール。
その説明が終わると同時に、古く誰も使っていない建物が見えてきた。

おそらく、あの中にいるのだろう。

「イッセー。ついでに悪魔の特性について説明するわ。
悪魔の駒（イーヴィル・ピース）
かつての戦争で大きく人数を減らした上級悪魔達が、チェスの特性を取り入れた少数精鋭の制度。
軍団を持つ代わりに、「駒」として少数の下僕悪魔に強大な力を分け与える。
それぞれ「女王×1」「僧侶×2」「戦車×2」「騎士×2」「兵士×8」の属性が与えられ
属性に合わせた能力を持つ。
そして、レーティングゲーム
勢力を大きく減退させた悪魔が、転生により強力な眷属を増やし、
かつ仲間を減らす事無く実戦経験を詰める為、
現政権で優遇されているゲームであり、実力主義の冥界ではゲーム成績が爵位や地位にまで大きく影響する
爵位持ちの上級悪魔達が、自身「王」と下僕を文字通りチェスの駒として、対戦相手の駒と戦うゲーム。
基本的に成人した悪魔しか参加することが出来ない。
私は成人していないから、まだゲームはできないわ」

ふーん。
まあ、大体は理解できたけど肝心な、力か聞けていない。
それに俺の役割ってなんだろ？

「部長、俺の役割って何ですか？」

「イッセーは・・・！？」

”いひひひひひ、うまそーな臭いがきたぁ”

おお！なんか肝試しみたいな声が聞こえる。
もしかしてはぐれＡＫＵＭＡ？

9話　怖い

ーイッセー視点ー

ホラーのような声が聞こえたすぐに血なまぐさい臭いが漂ってきた。
うげ！気持ちワル！

「はぐれ悪魔バイザー！あなたを抹消しに来たわ！！」

部長が叫ぶと返事をするように何かが俺達の前に飛んできた。
一体何を飛ばして・・・！？

「うっ！！？」

飛んできたものを見て吐き気がして来た。
そう、俺が見たものは・・・。
下半身のない、女性の死体だった。

「食いてぇなぁ・・・。その髪のように血も赤くてうまいのかなぁ・・・」

ズシン・・・ズシン・・・。

重い足音が、一歩、また一歩とこちらに向かって来る。
そして、俺達の前に現れたのは・・・。

「品性のない風貌ね、お似合いよ」

「小ざかしい小娘が・・・。その髪のように鮮血で染め上げてくれ

る」

下半身は四足歩行の獣で上半身は女性の姿をしたバケモノだった。
バイオだ。改造人間ＡＫＵＭＡには、どうやら細胞をいじくられた者も
いるようだ。
俺、あんな姿に改造されなくてよかった・・・。

「悠斗！」

「はい！」

部長が木場を呼ぶと木場が返事を返し、敵に突っ込んでいく。
おいおい！大丈夫なのか？

「イッセー、さっきの続きを教えるわ」

え？この状況で！？

「悠斗の特性は『騎士』。ナイトの特性はスピード。
そして悠斗の最大の武器は・・・捕らえきれないスピードで繰り出される
高速の剣撃！」

「がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

戸惑う俺に説明をする部長。
そして、木場を見ると目にも留まらぬ速さで刀を取り出し両腕を切り落とす。

スゲー・・・まるで投影のようだ。

「この小虫がぁぁぁぁぁ！」

バイオ生物が巨大な獣の足をつかい、木場を踏み潰そうとした時、
塔城さんが木場の下に行き踏み潰されてしまった。
えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！
あれって、死・・・。

「大丈夫よ、イッセー」

俺が驚いていると、部長が話しかけてくる。
いやいや！大丈夫じゃないでしょ！！

「子猫は『戦車』！ルークの特性は・・・」

「！？」

部長がルークの特性の話になると、塔城さんが踏まれた足が浮かび上がり、
足を持ち上げている塔城さんの姿が見えた。
これも・・・スゲーー・・・・。
いや、本当にスゲーとしか言いようがない。

「馬鹿げたパワーと防御力。だから、あの程度の攻撃じゃあ潰れないわ」

「吹っ飛べ」

そう言って、塔城さんがバイオ生物を殴り飛ばした。

いやー、凄い凄い。
もう相手はボロボロだ。

「最後は朱乃ね」

「はい、部長♪」

姫島先輩とてもニコニコしていますが・・・。
何か嫌な予感がする。

「朱乃の役割は『女王』」

「ゆるさぬぞ・・・」

姫島先輩はバイオ生物に近くまで歩いていく、
やばい・・・。頭の中のセンサーが見るな見るなと鳴り響いている。

「あらあら？まだまだ元気のようですね・・・。
これならどうでしょうか？」

バリバリバリ！

「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

なんてこった！姫島先輩は興奮した顔で雷を手から放っていらっしゃる！！

「兵士、騎士　戦車　僧侶の全てを兼ね備えた無敵の副部長よ
そして・・・究極のSよ」

「おほほほほほ！」

なんと姫島先輩はドＳだった。
なるほどクイーンがぴったりですね・・・。

「大丈夫、副部長は味方にはとても優しいから」

俺が怖がっているのが分かったのか、親切にも木場が教えてくれた。
それを聞いても怖いです。

「物足りませんが、最後は部長にお任せしますわ」

姫島先輩のＳプレイが終了し、部長がバイオ生物に近寄っていく。

「最後に言い残す事はあるかしら？」

「殺せ！」

バイオ生物の言葉を聞くと、部長は手に赤い玉のようなものを出し、
バイオ生物に向けた。

「消し飛びなさい！」

ドオン！

赤い玉は部長の掌から離れると巨大化してバイオ生物を飲み込み、
跡形も無く消し飛んで
しまった。
このメンバーマジで怖い。
いや、まてよ・・・つまり俺にもあんな力が・・・。

「ちなみにイッセーの役割は『兵士』よ」

たしか、兵士ってチェスの中だと最弱だよね・・・？

１０話　闇の王

ーイッセー視点ー

さて、バイオ生物の討伐から数日後の今日。
おれは、依頼者と契約を結ぶためテレポートしたのだが・・・。
おや？依頼者がいない・・・。
ちゃんと時間指定に来たのだけど・・・、トイレか？
少し歩き回るが、誰もいない。
もしかして、間違えたのか？
しかし、ここで最近嗅ぎなれた臭いがする。
血の臭い。
まさか・・・。
！？
リビングらしい部屋に入ると逆さ吊りで男性が杭を所々に刺され死んでいた。
おいおい！まさかここにも何か居るのか！？

「おやおや～、悪魔君ではございませんか～」

突然、台所の方から白い頭の青年が現れた。
もしかしてコイツが・・・。

「俺は神父～♪少年神父～♪」

クルッ！クルッ！

犯人だと思われる青年は、歌と踊りを披露しながら、俺に近づいてくる。
頭大丈夫か？

「俺はブリード・セルゼン、神父様ダヨ♪」

なんだ、コイツニヤニヤして気持ち悪い。
正直、この男は生理的に合わないから、早くどこかに行ってほしい。

「いやいや、悪魔くん。これから君を細切れにしようと思うんだ！いいよね！返事は聞かないレッツゴー！」

なんか、変な事を早口で喋ると、奴は腰からビームサーベルにそっくりな物と
拳銃をとりだした。
おいおい！こいつはもしかして、改造人間ＤＡＴＥＮＮＳＩか？黒い翼はまだ見てないが
あのビームサーベルは奴らのものと似ている。

「さあ、蜂の巣世界記録と細切れ世界記録に挑戦だ～！！」

頭の狂った発言をしながら、奴は俺に飛び掛ってきた。
おいおい！冗談じゃないぞ！？
俺は体を動かしたお陰で、ギリギリ、ビームサーベルの攻撃を避ける事が出来たのだが・・・。

パン！

一発の銃声と共に俺の右足に激痛が走る。

「いってぇ・・・！」

「光の弾丸ですよ！痛い？ねぇ痛い！？」

奴は苦しむ俺を楽しそうに見る。

光の弾丸ってビームライフルの拳銃版か！？

「さあ、死ね！クソ悪魔！！俺の悦楽のために！！」

奴は光の剣を振り上げ俺に斬りかかる。

まずい、やられる！！

思わず目を瞑り、全身に力が入る。

だが。

ズパァ！

何かが斬れる音と、暖かい何かが飛んできた。

俺は斬れていない、一体何が・・・。

目を開けると・・・。

「イッセー・・・さん・・・大丈夫・・・です・・・か・・・？」

そこには数日前に知り合った、シスターのアーシアちゃんが居た。

そして俺に優しい目を向けて、倒れる。

俺は慌てて倒れる彼女を受け止める。

傷を見る限り、俺の代わりに斬られた様だ。

おいおい！なんでここにいるんだよ！！？

なんで俺の代わりに斬られてるんだよ！！

「あちゃーー・・・、やっちまったよ、

まさか目の前に出てくるなんて・・・バカだなぁ。
まあ、上にはクソ悪魔に殺されましたと、報告すりゃあいいか」

こいつ！こいつ！こいつ！
俺は・・・貴様を絶対に許さない！
そして、助ける事が出来なかった自分自身が許せない！
自分に怒るのは後だ・・・今は奴を殺す！

想像しろ・・・。

汝の考える最強を・・・。

おいおい、また幻聴か？
でも、想像すればこいつを殺せるのか？

想像しろ・・・。

さすれば、汝はその最強になれるだろう・・・。

この間とは違い、どうすればいいのか手に取るようにわかる。
どうやら、この間のは不完全な状態だったようだ。
でも今は・・・

「さぁて、クソ悪魔くん。君の番だよ！
遺言はあるのかな？」

「我、闇よりもなお暗き存在」

「はあ？何言ってんの？頭おかしくなった？」

「我、夜よりもなお深き存在」

「おい？聞いてる？クソ悪魔？」

「我、混沌の海、たゆたいし、闇の王なり！」

「はぁ！？」

俺の体から、赤黒い強大な魔力が発生し、柱のように立ち上る。
これが、俺が想像した存在。
魔王を超え、神を超える、闇の王。
中二病全快で作った、最強の存在。

「イッセ・・・きゃあ！一体何が！？」

「部長！下がってください！危険です！！」

「コレは一体・・・？」

「下がります」

離れた所から、部長達の声が聞こえる。
もしかして、助けに来てくれたのか？
でも、だれも手出しさせない。
こいつは、俺が殺す！

11話　神を滅する斬撃

ーリアス視点ー

「部長！イッセー君の依頼者の家に近い使い魔の反応が消えました！」

「まさか・・・」

朱乃の報告には一つだけ、心当たりがある。
あの晩にイッセーをはぐれと間違えて殺そうとした、堕天使。
たしか名前はドーナシーク。
もしかしてイッセーを狙って・・・。
いや、それは可能性としては低い。
いくら、堕ちた天使であっても私の眷属に手を出せばどうなるか理解できているはず・・・。

「今は考えてもしょうがないわ、みんな！行くわよ！！」

「「「はい！」」」

私達は、イッセーの向かった家に、転移した。
しかし、転移した私達が見たものは、赤黒い、巨大な魔力の柱。

「イッセ・・・きゃあ！一体何が！？」

何なのこれは！？
イッセー！イッセーは大丈夫なの！？
何が起こっているのかは理解できてはいないが、私は下僕であるイ

ッセーの身を
心配し、よく見えるところまで進もうと一歩踏み出したのだが・・・
。

「部長！下がってください！危険です！！」

私が進もうとした事を察知したのか、木場が私の腕を掴む。

「コレは一体・・・？」

「下がります」

そして、朱乃は赤黒い巨大な魔力の柱を見て疑問を口にし、
子猫は冷静を装っているが、その足は震えていた。
いや、子猫だけじゃない。
子猫を含めた全員が震えている。
私達が離れようと後ろへ一歩一歩下がり、赤黒い柱を見守る。
外で騒ぎが起きないのは、おそらく人を寄せ付けない術がここら地
域一帯に
張られてあるお陰だろう。

しばらくすると、赤黒い魔力の柱は落ち着きを見せ、立ち上る魔力
はだんだん
小さくなっていった。
そのお陰で、少しずつ視界が広がる。
完全に魔力の放出がなくなった時、私達の前には三人の人物が居た。
血まみれになって、倒れているシスターに魔力の余波によってダメ
ージを受けたのか
痛みに耐えるような顔をして壁にもたれ掛かる、神父。
そして・・・。

そして、穴の開いた壁から来る風に長い漆黒の髪をなびかせる男が立っていた。

イッセーは・・・？イッセーはどこにいったの！？
私は慌てて回りを見渡すが、イッセーはいない。
もしかして、殺され・・・。

「フリード・・・なにがあったの・・・？」

「へへへ、いやぁすんませんね！アーシアちゃんはあのクソ悪魔に殺されちゃいました！
止めようとしたんでありんすけど、ぶっ飛ばされちゃってこのざ「黙れ」！？」

いつの間にか、この辺をチョロチョロしていた、堕天使達が集まってきた。
おそらく、異常事態を察知して様子を見に着たんだろう。
女の堕天使と神父が会話をするが、きにいらなかったのか
漆黒の長い髪の男が殺気を含めた低い声で神父に命令する。
神父に向けられた殺気なのにこっちにまで圧力がかかる。
しかも、さっきまでの魔力ではないにしろ、この魔力はお兄様以上。
つまり彼は・・・。

魔王クラス。
それも底の見えない・・・。

「あれが・・・。たしかにとんでもないバケモノね・・・正直、私の所有物を壊した
事について報復したいのだけど・・・貴方の事を、アザゼル様に報

告した方がよさそうね・・・」

「逃がすと、思うか・・・？」

ドン！

『くっ！！』

漆黒の長い髪の男、以外の全員が地に伏せる。
あまりのプレッシャーに当てられて、私達は立てなくなってしまった。

「死ぬ覚悟は十分か？」

「まって！私は至高の堕天使になるの！こんなところで死ねないのよ！！」

「天空（そら）の戒めとき離れたし凍れる黒き虚ろの刃よ」

彼はそんな堕天使の命乞いを無視して、膨大な魔力を右手に集中させ、
詠唱を始めた。

「お願い！やめて！私はまだ・・・」

「我が力となりて、共に滅びの道を歩まん、神々の魂すらも打ち砕け！」

ラグナ・ブレード！！

ジュ！

堕天使や神父全員を魔法で浮かべた瞬間、右手に集まっていた赤黒い魔力は大剣のような、形を形成し最後の詠唱を唱え、浮かんだ全員が一瞬で消し飛び、

余波でボロボロだった依頼主の家の二階が完全に堕天使達と共に消し飛んでしまった。

男は消し飛んだ事を確認すると、シスターを抱え私達の元にやってきた。

一体なにを・・・。

「この子を頼む」

「え？」

彼はそう一言残し、彼女を私達の前に寝かせ、消えた。

12話　フェニックス登場！

イッセー視点

昨日、部長達の前から逃げたイッセーです。
いや、だってしょうがないよね？
あんなコスプレな姿をしていたら・・・。
※闇の王のイメージはブリーチの月牙状態
でも、悔いはない！
不思議だよね、この感覚。
恥ずかしいけど後悔は無いって。

まあ、そのことはもういいとして・・・。

「イッセー、他所を向いていないで、昨日はどこにいたの？」

「あうぅ、イッセーさん」

現在、改造人間にされた、アーシアと部長に昨日の事を部室で聞かれているのです！
ははは、どうしよう・・・。

「イッセー君、僕達全員はかなりの時間をつかって君を探していた

んだよ。
だから、正直に話してほしい」

「そうね、あれだけ心配させたんだから正直に話してほしいわ」

「・・・」

木場と朱乃さんは怖い笑顔で後ろから語り掛け、東条さんは俺を無言で睨みつける。
とても怖いです・・・。

「あのね、イッセー。そろそろいいかげんに・・・」

ぱぁぁ！

部長が俺に問いただすと同時に、部室の床の魔法陣が光りだした。
見知らぬ紋章だ、どこの誰だろう？

「・・・フィニックス」

木場が呟く、フェニックス？不死鳥？
室内に眩い、光が広がると同時に人影が見える。
誰だ？

「ふぅ、人間界は久しぶりだ」

光が消え、目の前に現れたのは、赤いスーツをした金髪の男だった。
それにしてもチャラチャラした男だな～。
そんな事を思いつつ男を見ていると、部長に熱い視線を送り、
ニヤニヤし始めた。

あ、ダメだ俺。
この人は、生理的に無理だ・・・。

「愛しのリアス、会いに来たぜ」

おや？どうやら部長の知り合いのようだ。
どういう知り合いなのか、気になりつつ部長を見る。
あらら・・・。
俺が見た部長はメッチャ不機嫌だった。
男を半眼で見て、期限悪いですよ的なオーラが出ている。
よっぽど会いたくなかったんですね、俺も会いたくなかったです。
しかし、このチャラ男。
部長の雰囲気を無視して近づいていく。
おお、これがＫＹ。
別名、ク○ノ執務管か。
それから、一応の形でもチャラ男をてなす事になった。
よし、雑巾の水を茶にいれよう。

１０分後

結局お茶は朱乃さんが普通のものを出してしまい、俺の計画は失敗した。
つーか、あれフェニックスって事しか知らないんだけど。

「いい加減にしてちょうだい！」

おお！いきなり、部長がキレてソファから立ち上がる。
セクハラでもされたのかな？
なぜなら、部長は鋭くチャラ男を睨み。
チャラ男はチャラ男で口元をニヤニヤさせている。

殴りてぇ～～～～！！

「ん？そこのお前。俺に文句があるのか？」

「帰れ」（いえ、なにも・・・）

やっちまったーーーー！！

俺の視線に気がついて、いきなり話しかけるから

思わず、本音で喋っちまったよ！！

「テメェ、いい度胸してんじゃねぇか・・・」

思いっきり睨んでくるチャラ男、まさにチンピラ。

しかし、コイツは本当に部長の知り合いとしてダメだな。

いっそ縁を切ったほうがいいのでは？

「お前と部長とでは（知り合いとして）不釣合いだな」

「言いやがったな！下級悪魔風情が！！リアス、下僕の教育がなってないじゃねえか！？」

吼えまくる、チャラ男だが、部長は知るかとそっぽを向く。

まあ、そうだよね。

ガラ！

「失礼します」

突然の訪問者に室内全員の視線が集まる。

その訪問者は・・・。

銀髪のメイドさんだった。

東方キャラのコスプレですか？

１２話　フェニックス登場！（後書き）

感想・評価などをお待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1769u/

オタクのハイスクールＤ×Ｄ

2012年1月2日08時48分発行